

# 我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

## ◎ 第三話 曾祖母コヲの懐疑

西讃岐平野の真ん中に、四国霊場七五番札所、善通寺がある。弘法大師空海生誕の地とされ、彼の父、佐伯善通公の名を冠して、善通寺と名付けられた名刹である。明治政府は、この地に大日本帝国陸軍第一師団を置いた。明治三年のことである。四国兵は善通寺第一師団に編成され訓練を受けた。

この第一師団に師団長として任命されたのが、乃木希典である。

後、日露戦争が勃発すると、乃木は旅順攻略の第三軍指揮官となり、第一師団は乃木第三軍に編入される。旅順攻略戦は司馬遼太郎の『坂の上の雲』に詳しいが、四国兵もまた、ロシア軍の機関銃に向かって呐喊を繰り返し、血河屍山を築いた。

曾祖母コヲが夫の慶吾とともに、大阪から仁尾へ呼び戻されて、まず最初に気が付いたのが、共に遊び、小学校で共に学んだ同年輩の若者達が、仁尾の町からこっそり消えていたことである。

日露戦勝の時に生まれた次女に「勝子」という名を与えたコヲは、この時以来、明治政府と近代日本に対する疑いを懐くようになる。

## ◎ 第四話 曾祖父慶吾の逐電

壮図を懐いて、大阪へ乗り込んでいった挙句、不本意にも仁尾に呼び戻された慶吾はグレた。

挙句、博打にのめりこむこととなる。当時の博打は、丁半博打（チンチロリンともいう）である。時代劇によく出てくるサイコロを振って「丁か半か」というやつである。

仁尾にも賭場があり、慶吾は夜になると、入り浸っていたという。

だが、ある晩、警察に踏み込まれる。

賭場に集まっていた男達はクモの子を散らすように逃げ、慶吾も家に帰ると、まとまった金と道中差しを身にまとい、ほとぼりをさますため、仁尾の町から逐電した。

慶吾はどうやら、四国中を逃げて回っていたようだが、ある夕まぐれ、阿波の池田の辺りを歩いていた。池田は後に、高校野球の池田高校で有名になるが、四国の大野吉野川の中流で、吉野の流れに断崖が切れこむ険しい渓谷であり、四国の「へそ」ともいふべき土地である。その先は、祖谷溪谷があり、そこには平家の落人を名乗る集落が多い。慶吾はどうやら祖谷に落ちのびようとしていたらしい。泰田の家もまた、平家の落ち人である。

とその時、背後から「旅の人。お待ちなせよ！」と呼ぶ声がある。吉野川の地の底から湧いてくるようなどろきとともに、迫ってくる声を耳にした慶吾は、この声に追い付かれた時には命はないと覚悟して、崖道を駆けに駆けたという。

そうして、ようやくその声を振り切って、池田の町に跳びこんだ慶吾は、仁尾へ帰る時が来たことと決意したのだ。



仁尾許本店。仁尾にはこうした古い町並みが今も残る。